

「エホンシャウカ」の歌曲について

福井直秋

日本教育音楽協會で編纂した新幼稚園唱歌は全部で四十曲、之を十曲づゝに分けて春の巻、夏の巻、秋の巻、冬の巻の四冊になつてゐる。標題を「エホンシャウカ」として文字や樂譜の力に乏しい園児に對し繪本を主とし、母姊や教師のために樂譜を副にした編纂法を採つたのである。子供がこの本を一寸見たゞけで歌ひたくなり、又は手に取つて見たくなるやう、即ち子供に親しみのある名前及び體裁にしてある。其の内容について見ても協會が非常に精神をこめて作つたもので、幼稚園から小學校へ入學した當初即ち一年位の兒童にまで通じて幼少な子供すべてに歌はせてよろしいものである。今其の内容に就いて少しく検討して見よう。

一、音域について

兒童の唱歌わけても幼年なもの、歌曲では音域に就いて

注意することが最も重要である。子供には聲域の狭いものから順次廣いものを教へるやうに仕向けることが大切で、廣い聲域にわたつて出せば出し得るのであるが、音樂的にうるはしい聲を導かうとする爲めには、さうしても狭い曲から導かねばならぬことは言ふまでもない。この點に於て「エホンシャウカ」には、一點へ音から二點二音までの六音で出來たものが、總數四十曲の中十六曲までも這入つてゐる。それに「オクターブ」のものが二十曲、九度のものが僅に四曲にすぎない。從來の童謡集等でこんなに音域の狭いものを多數に集めたものは、殆ど無いといつて過言ではなからう。

二、拍子について

園児の歌ふ唱歌は拍子からいへば二拍子が最も適合して居るので、それは輕快で、明るく、單純なものだからであ

る。「エホンシャウカ」には四十曲の中三十三曲が四分の二拍子、それについて四分の四拍子、四分の三拍子の二種類が僅に加はつてゐる。従来は、三拍子は小學校に於いても初年級に於て不適當として取除かれてゐたやうであり、文部省の唱歌にも三年迄には三拍子の曲は一つも入つてゐない。併し三拍子は左様なものではなく、寧ろ子供にふさしいもので、西洋の子供の唱歌にたくさん二拍子の曲が這入つてゐる。一體曲は拍子だけで難易を決定する事は出来ない。二拍子でも三拍子でも其の他何拍子でもむづかしいものもあれば容易なものもある。左様な譯のものであるから「エホンシャウカ」に三拍子の易いものを加へたのであらう。誠に然るべきことである。従来低學年に比較的多く入れられてゐた四分の四拍子を三曲しか入れず、全然かへりみられなかつた四分の三拍子を三曲入れた點から見て、確かに今までの唱歌に較べて出色のある本であると思ふ。

三、曲の長さについて

曲の長さについては、研究の價値を多分に持つてゐるのである。即ち子供の曲はなるべく短くて、聲の疲勞を少く

し注意力に餘裕を存せしめて、歌ひ終つた後でもつゞ歌ひ度いさゝかを感じを殘す程度のものが宜しい。「エホンシャウカ」にはこの點に考量してあることが能く窺はれる。即ち四十曲中八小節のものが九曲、十二小節のものが十九曲、十四小節のものが一曲、十六小節のものが十一曲といった割合になつてゐる。而も一番長い十六小節のものに於てもその内容を内譯するに、四分の二拍子が九曲、四分の三拍子が一曲で、四分の四拍子のもものは「天皇陛下」だけ僅に一曲入つてゐるにすぎない。西洋では子供の歌ふ極短いものには二小節、三小節或は四五小節限りのものもある位である。

四、調子について

譜は教師が見るだけで子供に必要なのであるから、子供の歌ふ聲域の上から考へて調子を定めてある。従つて何調が何曲なごさいふ詮義だてをする必要はない。

五、音程について

音程については、成るべく子供の歌ひ易い音程を選択してあるといふ一言で盡きてゐる。然らば如何なる音程が歌ひ易くて、いかなる音程が歌ひにくいかにいふに、歌ひ易

いのが歌ひ易く、歌ひにくいのが歌ひにくいといつた方が一番簡單で且つわかり易い。我が國では從來度の廣狭によつて難易の差があるものゝやうに考へてゐたやうであるが、それは當つてゐない。オクターブでもドからドまで、ソからソまでなごは園兒にでも結構歌へるがファからファまで歌へない。又スイからスイまでは歌ひにくい。斯様に種々な相違があるので、之れを度数に依つて一律に難易を定められるものではない。斯様な點なごにも適當な注意を拂つて音程を採擇してある跡の歴然たるものゝあるのを、「エホンシャウカ」に於て窺ふこごが出来る。

六、旋法について

子供には短旋法の曲を澤山に歌はせない方がよい。わけでも園兒なごに於てある。「エホンシャウカ」四十曲中「マゴト」唯一曲だけ短旋法であるにすぎないのは、頗る吾人の意を得てゐる。子供を軽く、明るく、愉快に生活させやうとするには、彼等の歌ひ物に留意せねばならぬので、短旋法のふさはしからぬ自明の理である。

以上の外にその細目にわたつて詮索を進むるならば尙ほ

相當に記述すべき點があるであらう。併し吾人は右に述べたやうに、「エホンシャウカ」の大體に於て從來ありふれた幼兒の唱歌に比して頗る特色異彩あるを認むるのであるが、その特色異彩ある結構な「エホンシャウカ」が、園兒の如何なる聲によつて表出され、園兒の心情に對して如何なる反影を與ふるかこごの重大なるこごに想到するときは、この機會に於て園兒の發聲に就て一言し、正しい發聲の指導に就て附言するこごの無用ならざるを思ふものである。

從來否現在でも日本の園兒の唱歌の多くは絶叫號鳴である。胸聲を張り上げて怒鳴り散らしてゐるのである。園兒は無理に苦しみながら發聲すれば、二點八音の前後までは胸聲で歌ひ切るこごの出来るもので、これが園兒の唱歌の發聲の過誤を生ずる主因をなし、園兒の持つてゐる低い方の聲から指導するこごが副因をなしてゐるのである。顔を赤らめ胸を張り上げて歌ふ様なこごは、たごへ園兒が之をなし得るこごしても、堅く禁止すべきものであるこごを茲に強く言ひ切つて置きたい。

すべて子供の持つてゐる高い方の聲から歌ふこゝを導くのが、正しい練聲の方法で良い結果を齎すのである。過去の日本の歌はせ方は反對に常に下から導いてゐた爲に、正しい良い聲さならず、唱歌の發達を妨げてゐたのである。子供の唱歌に使はれる聲は、概ね中位若しくはそれより高い方の聲が多いのであるから、それらの聲を正しくそして綺麗に出させる様に幼稚園の初めから訓練せねばならぬ。例へば最初に二點二音位を出させ、之が正しくきれいに合せたならば、順次下の方に擴げて一點へ音位までを同じ要領で出させる。ところが上の方が正しく出せても下へ下るにつれて亂暴になり易い。即ちさなるやうになり易いのであるから、こゝに教師の指導を要する點があるのである。下の方をさなる様であつたならば又高い方へ返つて、高い方の要領で下の方を出させるやうに導く、かくする事によつて上から下へ、同じ様な聲質量できれいに發聲させる事が出来るやうになれば、下から上へもきれいに上るこゝが出来来る。上の方の聲はさうしてもさなる事が出来ないから、常にこれを基準にして高い方から導くのがよろしいのである。

この練聲を誤るゝ常に高い聲は小さくなり、低い方は大きく叫ぶやうになり、上と下との均衡を失ひ唱歌でなくなつてしまふのである。一體聲の出し方は唱歌の根本をなす重要なものであるにも拘はらず、日本の現在では幼稚園でも小學校でもあまりこれに注意を拂はないで、音の高低長さへ正しければ、良いものであるかのやうに取扱はれてゐるこゝは、頗る遺憾な事である。

歌詞についてはまた他日を期して述べるこゝにする。

